

百花繚乱 宮本三郎の描いた花

うごき リズム
心の躍動、花の律動。

7月29日^土 – 11月26日^日



〈芥子と立藤〉1967年頃

いつの時代も、花は私たち人間にとって身近な存在です。自然の中で、生活の傍らで、人々は花に愛情をこめた眼差しを注ぎ、同時に、自らの精神世界にも息づかせてきました。絵画という視覚芸術においても、多くの画家たちが、普遍的なモチーフの一つとして、花を描いてきました。

宮本三郎もまた、花を描いたことで知られる洋画家の一人です。明治期に生まれ、若くからその写実力を認められていた宮本は、日本における西洋油彩画の歩みを呼吸し、自らの筆を反映させていきました。戦前・戦後と二度にわたって西欧諸国に赴き、そこで西洋絵画の精神と歴史を学んだ宮本は、日本における洋画の進むべき方向をつねに考えつづけていたに違いありません。

戦後、抽象画の嵐が吹き荒れる中、彼自身の制作の姿勢を支え続けていたものの一つは、日々たゆまず行われたデッサンでした。特に1960年代から晩年にかけては、裸婦像とともに、数多くの花々が描かれています。“花を描くのは日常の生活”（「花と裸婦を描く」『三彩』1967年8月号）という宮本は、次のように述べています。

「(前略) 人体と花模様が一種渾然たる状態で、画面の上では筆触として心のはづみを托するリズム感となって、空間人体とを一つの律動感の中に織り込むねらいが、自然と方向づけられて行った様である。(中略) 裸体も花の如く、感動を歌い上げ得るところまでにこぎつけられてゆくように思えて、心も次第に躍動し、筆も喜びを歌うように思えるのがあった。(後略)」(同上)

このように語る宮本の花々は、描かれた裸婦とともに、華麗な色彩と生きいきとしたタッチによって、はずむ心^{リズム}の律動、生命の喜びを謳いあげているようです。最晩年の神話を主題とした作品群の中に描かれる花々は、単に花そのものの造形や色彩の美しさといった外見の美を超え、宮本自身の精神世界を象徴するものの一つとして、位置づけられていたのではないかと思われるのです。

そうした晩年の作品とともに、本展では、宮本の画業の中で描かれた花の作品を、宮本の眼差しをより近く感じることのできる素描作品と併せてご紹介いたします。絵画の中で表現される“花”というモチーフの魅力と、あらためて感じていただければと思います。



〈ひまわり〉1961年頃



〈婦人像〉1969年頃



〈かいゆう〉1967～71年頃